異学年協働学習による総合的な学習の実践

―「生きる力」を育む総合的な学習を目指して―

國原　信太郎

The Period for Integrated Studies through joint learning between different grades

― Aiming for the Period for Integrated Studies that fosters ”The zest for living” ―

Shintaro KUNIHARA

教職キャリア高度化センター教育実践研究紀要

第２号 （2020年３月）

Journal of Educational Research
Center for Educational Career Enhancement

No.2（March 2020）

異学年協働学習による総合的な学習の実践

―「生きる力」を育む総合的な学習を目指して―

國原　信太郎

（京都教育大学附属京都小中学校）

The Period for Integrated Studies through joint learning between different grades

―Aiming for the Period for Integrated Studies that fosters ”The zest for living”―

Shintaro KUNIHARA

2019 年 11 月 18 日受理

抄録：本実践研究は，5･6･7 年生による縦割りでの総合的な学習を通して，次期学習指導要領が求める「生きる力」を育むことを目指したものである。５年生の素直で意欲的に課題に取り組む学習姿勢を目の当たりにし，6･7 年生は自分を省みる機会を得ることができた。また，探究活動において，上級生は，リーダーシップを発揮することで，自己有用性を感じ，相手を思いやりながら活動する姿が見られた。与えられた課題を，異学年で構成された学習班で解決しようとする総合的な学習では，よりよく問題を解決する資質・能力が育まれ，コミュニケーション力を土台とした「生きる力」を育むことに有効であることが分かった。

キーワード：総合的な学習　生きる力　異学年協働学習　小中連携　資質・能力　コミュニケーション力

Ⅰ．はじめに

子供たちに「生きる力」を育むため，新学習指導要領では，知識及び技能，思考力・判断力・表現力等，学びに向かう力・人間性等の育成が大きな目標になる。これは，これからの社会が知識基盤型化やグローバル化がより一層進み，アイディアなどの知識そのものや人材をめぐる国際競争がどんどん過熱する中で，その競争の中を生き抜いていくための力を育成しなければならないためである。

このような社会情勢の中，上記のような力を育むために，学校教育でも，生徒達に様々な変化に積極的に向かい合わせ，他者と協働して課題を解決させ，収集した情報を見極め，必要な情報を活用することにより新しい価値を発見させる機会を多く持たせる必要がある。とりわけ，総合的な学習の時間は，「①課題の設定→②情報の収集→③整理・分析→④まとめ・表現」の探究プロセスで学習活動が行われるため，そのような機会を多く持たせることが可能である。また，全国学力・学習状況調査を分析すると，総合的な学習の時間で探究のプロセスを意識した学習活動にとりくんでいる生徒ほど，教科の正答率が高い傾向にあることが分かる。さらに，総合的な学習は OECD が実施する学習到達度調査（PISA）における好成績にも繋がり，学習姿勢の改善に大きく貢献するものとして OECD をはじめ，国際的に高く評価されており，総合的な学習の時間への取組が，知識・技能の定着と思考力・判断力・表現力の育成に繋がっていると言える。

しかしながら，総合的な学習の時間で，様々な取り組みや活動は行うが，何を学んだのか，どのようなことができるようになったのか，ということを自覚できないような生徒を生み出してしまうようなケースが散見するのも事実である。

そこで，本稿では，次期学習指導要領で目指す「生きる力」を育むため，知識及び技能，思考力・判断力・表現力等，学びに向かう力・人間性等の育成のために，これからの総合的な学習の時間はどうあるべきかを考察し，その考察を元に行った授業実践の成果と課題を報告したい。

Ⅱ．本校の実態

京都教育大学附属京都小中学校では，平成 15 年度から母体となる京都教育大学と一体になって小中一貫教育を研究し，平成 29 年 4 月 1 日より国立大学の附属学校で，初めての義務教育学校に移行し，義務教育 9 年間を一貫して捉える教育課程編成や系統的な教育・学習を目指して教育を推進している。そして，学習組織や生徒集団編成に関する研究から，9 年間を初等部（小 1～小 4），中等部（小 5～中 1），高等部（中 2～中 3）と区分し，4-3-2 制の教育課程を採用している。

文部科学省は，平成 21 年に実施した子どもの徳育に関する懇談会の中で，9 歳以降の小学校高学年の時期を，「自己に対する肯定的な意識を持てず，劣等感を持ちやすくなる時期」とし，「ギャングエイジとも言われるこの時期は，閉鎖的な子どもの仲間集団が発生し，付和雷同的な行動が見られる。」と述べている。さらに，都道府県・市町村教育委員会で平成 22 年に実施した小学校中学校連携についての実態調査では，「授業の理解度」「学校の楽しさ」「教科や活動の時間の好き嫌い」について，中学生になると肯定的回答をする生徒の割合が下がる傾向にあることや，「学習上の悩み」として「上手な勉強の仕方がわからない」と回答する生徒数や，暴力行為の加害児童生徒数，いじめの認知件数，不登校生徒数が中学校 1 年生になったときに大幅に増える実態が明らかになっている。

以上のような社会的状況や実態調査に鑑みて，本校では 4-3-2 区分を取り入れ，小学校 4 年生頃から子供達の心身の発達，思春期に見られる内面の変化への対応，小学校 6 年生と中学校 1 年生をまとめて一つの区分にすることにより小中間の移行の難しさを解消することを目指している。なお，4-3-2 の枠組みと，各部の狙いは表 1 の通りである。

初等部（1～4年） 学級担任制	中等部（5～7年） 教科担任を取り入れた 学級担任制	高等部（8～9年） 教科担任制
基礎基本の徹底を図る ・学習や活動の楽しさを十分に感じさせる。 ・反復練習（くり返しとやり直し）を大事にする。 ・体験活動を楽しみ，実際の体験を通して，感じたり知ったりすることを大事にする。 ・子供の自主性や関心や意欲を大切にしながらも，必要と思われる基礎基本の事項はくり返し練習し確実に身につかせる。 ・失敗を乗り越えたり，成功に向けて考えたりするなど，試行錯誤を経験する時間的，精神的な余裕を持たせる。	**一人一人の学力の定着を図る** ・学習の必要性を感じ，意欲を持って学習できるようにする。 ・反復練習の効果の大切さを知った上で，進んで練習する態度を身につけさせる。 ・体験や具体物を通してのみではなく，抽象的な思考もできるようにする。 ・自ら課題を見つけ，解決するための学習方法を身につける。 ・粘り強く取り組む力を身につけさせる。 ・自分の興味，関心だけではなく，自分にとって何が必要かを考えて取り組むべき課題を選ぶことができるようにする。	**興味・関心や能力に応じた指導を行い個性の伸長を図る** ・自分の個性を自覚化し，自分の課題を選んで学習することができる。 ・自分の学力を客観的に見つめることができるようにする。 ・自分で選んだことに自覚と責任を持って最後までやり抜く態度を身につけさせる。 ・自分の個性や能力を知り，上級学校に向けてより良い進路選択ができる。

表 1　4-3-2 の枠組みと各部の狙い（京都教育大学附属京都小中学校教育実践紀要 2009 より）

Ⅲ．２０１８年度総合的な学習の実践

1 対象学年とテーマ設定理由

今回の総合的な学習の実践は，中等部（小 5～中 1）で行った異学年合同学習である。総合的な学習を単独学年では行わず，中等部という縦割りの中で行った理由は，縦に連続する学年が一体となって一つの活動に取り組

むことで，発達段階の違いも含めてひとりひとりの個性がより際立ち，相手の思いや考え方をお互いの立場を踏まえて捉えたり，考えたりできるからである。さらに，従来中学校では最下級生であった中学 1 年（7 年）が，5･6 年のリーダー的役割を果たし，7 年のリードに任せながら自らの意見や考えを出し合い，それらを 7 年を中心に考察し，まとめていくことができるところに大きな教育的効果があるはずである。異学年の生徒同士が，共に話し合い，考え合う中で，自らを主張したり，協調したりしながら，互いに協力し合うことの価値や，相手とのコミュニケーションの大切さを学び取り，実践していくことで，コミュニケーション力というコンピテンシーが育まれ，それが「生きる力」に繋がるのではないかと考えた。

縦割りでの総合的な学習の取組は，平成 22 年度から形式や課題等をマイナーチェンジしながら本校で行われている。しかし，22 年度に行われた初めての 5･6･7 年による総合的な学習から，大きな柱となるテーマは「コミュニティーや自分達が住む町」についてと変わらない。これは，小学校学習指導要領（平成 29 年告示）・中学校学習指導要領（平成 29 年告示）「総合的な学習時間編」第 5 章第 3 節に記載されている「地域や学校の特色に応じた課題」に見合ったものである。自分達が生活する地域の人々の暮らし，伝統と文化など地域や学校に応じた課題を設定することで，自己の生活や生き方との関わりの中で課題を捉えることにより生じる課題は，正解や答が一つに定まっているわけではなく，場合によっては答を導き出すことが困難であることもあるため，既存の教科の枠組みでは適切に扱うことができない。したがって，こうした課題を総合的な学習の時間の課題として取り上げ，その解決を通して具体的な資質・能力を育成することに大きな意義がある。

今年度の実践での生徒への課題は，「京都の魅力とこれからのまちづくりを考える」とした。これは，前述の小学校・中学校学習指導要領「総合的な学習時間編」第 5 章第 3 節「地域や学校の特色に応じた課題」に具体例として記載されている「町づくり」，「伝統文化」を意識して設定した課題である。さらに，本校が推進してきた総合的な学習の流れ，そして，学習指導要領，どちらからも大きく逸脱しないような課題設定とした。

2 本実践における目的

「京都の魅力とこれからのまちづくりを考える」という課題の解決に向けて，まずは京都のまちの中に潜むユニバーサルデザインを一つの視点とした。これは，課題だけを提示し，「探究活動をしなさい」ではあまりにも範囲が広く，限られた時間で課題解決に向かうことが難しいと考えたからである。まちに潜むユニバーサルデザインに気付き，意識することで，京都にはまだまだ多くのバリアーが存在することや，観光都市京都をさらなる世界都市にするためには，そのバリアーの減らしていくまちづくりが必要であることに生徒達は気付き，その改善策を考えていくはずである。さらには，まちの交通に意識を向けさせ，日常利用している交通から「人や社会にやさしいまちづくり」についても探究させることにした。日常生活を送る上で，普段何気に接しているであろう，ユニバーサルデザインや交通に意識を向けさせることで，それらを視点として「京都の魅力とこれからのまちづくりを考える」という範囲の広い課題に対して，その解決を図らせた。

異学年協働での活動では，5～7 年（小 5～中 1）の生徒たちが，調べた内容や考えたことを持ち寄りって探究を深めることで，より一層社会に目を向け，自らがその一員であることの自覚を持ち，より良い地域や社会を創造するために活動できる力の素地を育成し，「生きる力」の伸長を目指した。

3　年間指導計画概要

前期は，発達段階に応じた学年別の学習活動や探究活動をさせる。後期は，異学年協働で探究活動を進めていくことで，上級生のリーダーシップが発揮される。あわせて，発達の段階の違いから生じる視点や考えの違いを感じさせ，探究内容を深めさせるようにした。（表 2）

期	実施時期	学習体系	学習内容・目的
前期	4～7月	学年別	外部講師による講義，個人探究，グループでの探究活動 （最終目標）みやこユニバーサルデザイン賞応募用紙作成
後期	9～12月	異学年 合　同	個人探究をもとにした探究活動（異学年協働学習） （最終目標）ポスター作成，ポスターセッション

表 2　年間指導計画概要

4　年間指導計画詳細

探究活動が中心となるため，1 回の授業は 50 分×2 コマの 100 分とし，十分な活動時間を確保できるようにした。前期は各学年ごとにユニバーサルデザインについて学び，夏季休業中は自らテーマを設定させ，自主的に探究活動を行わせ，その活動結果を A4 用紙 1 枚のリーフレットにまとめさせた。後期はそのリーフレットをベースに探究活動を進めさせた。（表 3）

回	月	内　　容	活 動 場 所
1	5	・オリエンテーション ・ユニバーサルデザインについて	・講堂 ・各学級
2	6	・嵯峨美術短期大学教授　坂田岳彦氏　による講義	・講堂
3		・探究活動 ユニバーサルデザインについて調べる（終了後レポート提出）	・各学級 ・メディア室
4	7	・みやこユニバーサルデザイン賞応募用紙作成　（終了後応募用紙提出）	・各学級
夏季 休業	8	【課題】京都のまちづくりについて 「テーマ」を決めて探究活動を行う。（リーフレット作成・提出）	
5	9	・オリエンテーション ・異学年グループ顔合わせ　　・探究テーマ設定	・講堂 ・各学級　・メディア室
6～8	10 11	・ポスター作成 【注意事項】前期の学習がいきるような探究活動を進める。	・各学級 ・メディア室
9	12	・ポスターセッション　（相互評価シート提出）	・各学級

表 3　年間指導計画詳細

5 学習内容

5～7 月を前期（1 回～4 回），9～11 月（5 回～9 回）を後期と設定してそれぞれに課題を設定し，探究活動を行わせた。

前期では，テーマを「まちに潜むユニバーサルデザインを探る」とし，京都のまちに潜むユニバーサルデザインを探しながら，バリアーの無い街づくりには何が必要かを考え，京都をさらに魅力的な観光都市にするにはどうすればいいのかをユニバーサルデザインを視点として考えさせた。ここでは，発達段階の違いによる知識に大きな差があるため，テーマについて各学年に分け，担任で発達段階に沿った学習活動を行った。学習活動を進めるにあたり，ユニバーサルデザインに関してより詳しく学ばせる必要があったため，京都市のユニバーサルデザインアドバイザー派遣制度を活用し，嵯峨美術短期大学美術科の坂田岳彦教授をお招きし，ユニバーサルデザインに関する講義をしていただいた。その学びを土台として，ユニバーサルデザインに関する探究を深め，前期のまとめとして，前期最後の授業で，京都市主催の「みやこユニバーサルデザイン賞」への応募作品を考えさせた。

夏季休業中は，「京都のまちづくり」という課題を与え，「京都のまちの魅力」，「まちをさらに魅力的にするためにはどうすれば良いのか」，さらには前期で学んだユニバーサルデザインをいかして，まちに潜むユニバ

ーサルデザインを調べたり，逆にユニバーサルデザインが必要な場所などを調べさせたりし，それらをまとめたリーフレットの作成を行わせた。

後期は，５年～７年で男女混合４人グループ（各学年１～２名，男女２名ずつ）を６７グループ作り，１教室に７～８グループを配置し，夏までに学習したことや，夏季休業中に作成したリーフレットを各グループで持ち寄らせ，「京都の魅力とこれからのまちづくり」を課題として，異学年で調べ学習や探究活動をさせた。そして，グループの中で考えたり，話し合ったりした内容を模造紙にまとめさせ，後期の最終目標であるポスターセッションに向けて，ポスター作りをさせた。その際，「京都における交通事情やその問題，改善策」を共通課題とし，各グループで必ずこの課題に取り組むようにさせた。これは，前期のユニバーサルデザインの学習と同様，身近な課題について考えさせることが目的の１つであるが，全班が共通課題に取り組むことで，ポスターセッション時により質の高い質疑応答が行われるのではないかと考えたからである。最終のポスターセッションでは，発表班のメンバーが，ポスターを用いながらこれまでの探究内容を５分で説明し，その後，質疑応答の時間を取った。また，発表する班以外の生徒達は，発表に関しての考察や感想を相互評価シートに記録させた。

6 授業の実際（後期の探究活動）

（1）目標

・「京都の魅力とこれからのまちづくり」をテーマに，自分達が生活するまちについて調べ，まちの現状を知り，課題を見つけて，更に魅力ある都市にするためには何が必要か考えるとともに，自己の社会での生き方についても考える。

・自らの考えや調べたことを，異学年で構成されたグループで伝え合い，議論し合うことにで，ポスターセッションのためのポスターを作成していき，社会で通用するコミュニケーション力の習得を目指し，「生きる力」を育てる。

（2）働かせる資質や能力や育てたい態度

Ａ.学習に関すること

・課題に対して興味関心を持ち，習得している知識・技能を活用する。

・出てきた意見や考えを，論理的に思考し分析する。

・課題に対して主体的に情報を集め，集めた情報を適切に取捨選択し，活用する。

・最終目標に向けて，伝えたいことや説明したいことを，論理的に表現する。

Ｂ．自分自身に関すること

・自らの課題解決に向けて計画的に見通しを持った探究活動をする。

・自らの生活の在り方を見直し，学んだことや考えたことを，日常的に実践する。

Ｃ．他者や社会との関わりに関すること

・異なる意見や他者の考えを受け入れ，尊重する。

・他者との交流を深め，豊かな人間関係を築く。

・グループのメンバーと協力して根気強く課題を追求し，解決する。

・社会の中に生きる一員として，自分は何ができるのか，何をすべきか考える。

（３）学習展開例

表 4 に後期の学習展開例（50 分×2 コマ）として，ポスターセッションに向けてのポスター作りの授業展開を示した。探究的な活動の時間であるため，生徒主体の時間になるが，教員がファシリテーターやアドバイザーの役割を担い，どれだけサポートを行えるかが生徒の深い学び合いに繋がる。

	生徒の学習活動	指導者の支援及び留意点
導入	・前回活動に対しての振り返りをする。 ・本時の流れを確認する。 ・特別教室使用の確認をする。	・前回活動の様子や，提出させた振り返りシートから気付いたこと，考えさせたいことを生徒に伝える。 ・本時の流れ，残りの時数を確認させ，最終目標に向けての計画を確認させる。 ・メディア室，図書室などの特別教室の使用時間，使い方の確認をさせる。
展開	・各グループで調べてきたもの，まとめてきたものを検討し，今日の活動方針を決める。 ・ポスター作成のためにどのような情報が必要か考える。 ・挙がった疑問や課題については，グループで議論し，課題の解決を図る。 ・ポスターの作成をする。 ・必要な情報を収集し，活用する。 （図書館，メディア教室の活用）	・各グループの活動を見回り，活動方針についてアドバイスを行う。 ・ポスターの作成状況を確認する。 ・グループで挙がった疑問や課題について，話し合わせ，必要が有れば，教員が支援を行う。 ・これまでの活動がいきるような話し合いになるように声かけをする。 ・文献の探し方，パソコンの操作での支援を行う。
まとめ	・次回までの検討課題を設定する。 ・活動を振り返る。 ・振り返りシートを記入する。 ・振り返りを発表し，考えたことや活動したことを共有する。 ・担当教員からの講評を聞く。	・グループで次回までに考えておくこと，調べておくことを考えさせる。 ・振り返りシートに，今日の活動，探究の過程を記入させる。 ・振り返りを発表させ，全体で共有する。 ・今後の活動意欲を高めるような講評をする。

表４　学習展開例（後期）

（４）評価方法

・グループでの話し合い活動の様子（観察による評価）

・ポスターの制作過程の確認（観察による評価，制作物による評価）

・振り返りシートと，全体発表の様子（観察による評価，提出物による評価）

Ⅳ．成果と課題

本実践では，日頃接している同学年の集団ではなく，年齢の異なる集団で探究活動をしていくことになるため，自分の年齢上の立場や役割，さらに課題を探究していく上で，自分は社会の様々な構成員の一人であるということを自覚することができたのではないかと考える。５年生の，素直で意欲的に課題に取り組む学習姿勢を目の当たりにすることで，６・７年生は自分を省みる機会を得，同時に上級生としてリーダーシップを発揮することで，自己有用性を感じ，相手を思いやり，気遣いしながら活動する姿がいたる場面で見られた。また，異学年集団という日々の学習環境とは異なる環境で学び合いをしていく中，小中一貫教育という環境で学んできた生徒達は，固定化してしまっている人間関係を良い意味で崩し，自分や他者を再発見する機会にもなっていた。実際，後期のスタートでは，教員の指示がなくても座席の指定を最上級学年である７年が黒板に書いて示し，話し合いや探究活動でも７年がリーダーシップを発揮して進め，５・６年は上級学年から多くのことを学び，学年は違うが，与えられた課題を自分たちの力で解決しようとする中で，自然とコミュニケーション力が育まれていた。

前期の学習活動は，異学年ではなく，単独学年での学習であったため上級学年から学ぶ機会は無かったが，発達段階に応じた学習活動を進めていくことで，後の学習活動に繋げる知識や技能，学びに向かう姿勢を育てるこ

とができた。小学校・中学校学習指導要領総合的な学習の時間編第６章第２節「年間指導計画の作成」の「２作成及び実施上の配慮事項（１）生徒の学習経験に配慮すること」の中にも，「発達段階に応じた経験の有無が，後の学習活動の成否を左右することもあり，注意を要する」とある。そのため，前期では後期の学習活動にスムースに入るための準備期間と位置づけ，各発達段階に沿った学習活動を行った。ただ，教員だけの力では，専門的なことへの指導が難しいため，ユニバーサルデザインの学習においては，京都市のユニバーサルデザインアドバイザー派遣制度を活用し，嵯峨美術短期大学美術科の坂田岳彦教授に講義を行ってもらった。やはり，専門的な部分に関しては教員だけの力ではなく，外部の専門家に講義をしてもらうのが効果的であり，５年生でも分かりやすいユニバーサルデザインの講義をしてもらったことにより，生徒達は身近なユニバーサルデザインをかなり意識するようになった。

前期最後の課題は，これまでの学習を生かして，「みやこユニバーサルデザイン賞」に応募する作品を考えるというものであったが，前期の学習でユニバーサルデザインについて学習した生徒達は，各教科で身につけた知識も活かしながら，日常の生活に関わるユニバーサルデザインを主体的に考え，時にはクラスメイトとより良い作品を作り上げるために意見交流しながら，既存のユニバーサルデザインを学び，新しいユニバーサルデザインを生み出そうとしていた。この活動により，学んだり理解したりしたことをどう使うかを具現化することができたため，生徒達の学びはより一層深まったといえる。結果，「みやこユニバーサルデザイン賞」では，「アイデア部門」・「ＵＤショートメッセージ部門」の両部門で大賞を受賞することができた。また，大賞以外にも，アイデア賞２名，佳作１名が受賞し，前期での学習の成果が大いに発揮することができた。受賞学年とその人数を見てみると，大賞の２人は５年生，アイデア賞と佳作の３名が６年生で，最上級学年である７年生は０名であった。したがって，学年が上がれば考えや発想が深くなるというわけではなく，課題に対する熱意や真剣さ，創造性は下級学年の方が高いことが実証できる結果となった。全生徒の応募用紙を見ても，決して７年の作品が良い訳ではなく，相対的に学年が低くなればなるほど，熱意や真剣さが伝わり，さらに丁寧に取り組んだ跡が見られ，それが結果に表れたのではないかと考えられる。そう考えると，５・６・７年生でグループを組み探究活動を行っても，７年生が５・６年生の熱意や創造性から刺激を受けることも多く，最上級生の７年生の学びが少なくなることが決して無いと，この賞の結果から分かった。

夏季休業中の課題リーフレットは，ネットで調べるだけではなく，実際に自分の目で見て調べてくる生徒が多かった。しかし，中には，ネットを活用しただけのリーフレットもあり，そのようなリーフレットは情報の羅列であり，内容そのものが浅く感じられた。このような調べ学習をする生徒は，何かを調べると言うことは，自分の目で見て，触れてみなければ本当の良さが見えず，そのものの本質にまで迫ることができないと言うことを，認識していないのではないかと感じた。これは後期の授業の課題にもなったが，ネットに依存した調べ学習には限界があるように感じられた。なお，夏休み明けにとった意識調査では，「リーフレット作成に何を活用したのか」という設問に，「インターネット」と回答した生徒が最も多かった。ただ，これは複数回答可であり，実際に一番多かった回答は「インターネットと実際に見に行った」であった。その調査結果は，５年生が「インターネット活用」が 20.8%，「実際に見に行った」が 7.2%，「インターネット活用」と「実際見に行った」の２つを回答したのは 52.3%になった。６年生は，「インターネット活用」が 11%，「実際見に行った」が 8%，「インターネット活用」と「実際見に行った」の２つを回答したのは 58.2%になり，７年生はインターネット活用」が 6.2%，「実際見に行った」が 12%，「インターネット活用」と「実際見に行った」の２つを回答したのは 63.3%となった。学年が上がるにつれ，インターネットのみの数が減り，実際に目で見て課題を仕上げた生徒が多くなった。これは，７年生といえば

中学１年生であるから，１人での行動範囲が広かったり，時間的・金銭的にも５・６年生に比べると余裕があるという発達段階上の理由が考えられる。結果，学年が上がるにつれて実際に目で見てテーマに沿ったリーフレットを作成しており，前期最後の課題である「みやこユニバーサルデザイン賞」とは異なり，このリーフレットに関しては，学年が上がるにつれて京都のまちの魅力や課題がよく伝わるようなものが多かった。しかし，「インターネット」のみでリーフレットを仕上げている生徒もアンケートの結果を見る限り多数いる事が分かり，総合的な学習における調べ学習の在り方において，やはり大きな課題を残す結果となった。

後期は，「京都の魅力とこれからのまちづくり」を課題として，異学年で構成されたグループで探究活動を進めたが，上級学年がイニシアチブを取り，前期に学習したユニバーサルデザインや，夏季休業中に取り組んだリーフレットを元に自分達の力で協働学習を進めることができた。小林秀樹・西川純は「中学校理科における異学年の学び合い」の中で，「異学年班が，人間関係においてトラブルが少なく，質の高い学びであったことから，協働学習では，学年差があった方が，かえってうまくいく。」と述べていることから，異学年により構成されたグループは，発達段階による知識や技能に大きな差はあれど，人間関係や，思考の深まりといった面で大きなメリットもあり，今回の実践でもそれを感じることができた。「京都の魅力とこれからのまちづくり」という解決の道筋がすぐには明らかにならない課題に対して，学年は違えど，それぞれが持てる知識や考えを総合的に働かせて，目前の具体的な課題に粘り強く対処し，解決しようとする姿勢がどのグループにも見うけられた。また，日頃はリーダーシップを発揮することが苦手な生徒が，下級生しかいないグループをまとめるためにリーダーシップを発揮したり，逆に上級生の能力が厳しいグループでは，自然と下級生がイニシアチブを取っていたり，時には，上級生に対して下級生が意見や提案をするような場面があったりした。普段はおとなしい生徒がリーダーシップを発揮したり，下級生がイニシアチブを取るような場面が多くみられることで，教員側も新しい発見があった。

後期の授業展開は，前述の学習展開例に書いたとおりであり，教員はファシリテーターに徹し，生徒たちの主体的な取り組みで協働学習は進んだ。前期に学習したユニバーサルデザインや，夏休みに作成したリーフレットを一つの視点とし，「京都の魅力とこれからのまちづくり」という課題について考え，議論し，模造紙にまとめていく。生じた疑問や課題については，活動時間内ならインターネットや書籍で調べ，活動時間内にできないことは，グループで分担して持ち帰って次回の総合的な学習の時間までに調べて持ち寄るという流れであった。このような取り組みの様子を見ていると，学習指導要領第２節「（１）探究的な見方・考え方を働かせる」に記載されている，「①日常生活や社会に目を向けた時に湧き上がってくる疑問や関心に基づいて自ら課題を見つけ，②そこにある具体的な問題について情報を収集し，③その情報を整理・分析したり知識や技能に結びつけたり，考えを出し合ったりしながら問題の解決に取り組み，④明らかになった考えや意見などをまとめ・表現し，そこからまた新たな課題を見つけ，更なる問題の解決を始める」といった流れの学習活動が達成できていると言える。ただし，集めてくる情報の大部分が，インターネットに依存しているということは，大きな課題であると考える。もちろん，生徒たちはインターネットから収集した情報を取捨選択し，分析もしている。学習指導要領の中でも「探究的な学習の目的に応じて，本やインターネットを活用したり，適切な相手を見つけて問い合わせをしたりして，学習課題に関する情報を幅広く収集し」とあるので，インターネットの活用そのものに問題があるという訳ではないが，調べ学習の大部分がインターネットに依存してしまっていることは改善をしていかねばならないと感じた。あるグループが，登下校で利用している駅について調べていたのだが，毎日利用している駅にも関わらず，ネット検索でその駅について調べ，情報を収集していたという姿を見てもそう感じた。本来ならば，実際にその駅に行って，自分たちの目で見て，また「その場で適切な相手を見つけて問い合わせをしたりして」情報を収集するほうがより正確な情報が得ら

れるであろうし，また次の課題も新たに発見できる可能性がある。したがって，インターネット上にある情報を中心に探究活動を進めることに関しては，これから何かしらの改善を施さねばならないと今回の実践で強く感じた。

後期最終のポスターセッションでは，各グループが自分たちの探究成果をまとめたポスターを使い，メンバー全員でその成果を説明し，その後，質疑応答を行った。質疑応答の場面では，それぞれの既存の経験や知識と，総合的な学習の時間における活動により整理・分析された情報とが繋がり，ひとりひとりが改めて深く課題について考えていくことで，問題がより鮮明になったり，新たな疑問が生じたりしていた。とりわけ，全グループの共通課題とした「京都における交通事情やその問題，改善策」に関しては，それぞれが日々使っている公共交通機関に関連するものが多く，自分たちの日々の経験と関連させての質疑応答が多かった。後期は「京都の魅力とこれからのまちづくり」という大きな課題であったため，各グループの探究活動はそれぞれバラバラであったが，全グループに「京都における交通事情やその問題，改善策」という共通課題を持たせることで，その課題に関しては必ずグループ活動時に考えたり，議論をしているはずなので，最後の質疑応答時にも議論が深まり，表面的ではない深まりのある探究的な学習活動を実現することができた。

以上のような成果より，異学年協働で探究活動を進め，ポスターセッションに取り組ませることで，よりよく問題を解決する資質・能力や，社会で必要となるコミュニケーション力を育成することができ，「生きる力」を育むことができたと言える。

Ⅴ．おわりに

5･6･7 年生による総合的な学習の時間は，平成 22 年度から本校で取り組まれているため，今年で 9 年目になる。その間，生じた様々な課題に対応するため，総合的な学習の時間の企画立案担当者がその都度マイナーチェンジを行い，ここまで継続してきた。マイナーチェンジの内容には，例えば，パワーポイントの使用禁止がある。当初は，最終発表はパワーポイントの使用を認めていたのだが，あまりにもパワーポイントに依存しすぎた発表が相次いだため，パワーポイントの使用を禁止し，ポスターセッションでの最終発表という形をとるようになった。こうすることで，各グループの最終発表に工夫がみられ，画一的にならず，それぞれが相手や目的を意識して明確にまとめたり，表現したりすることができるようになり，生徒達自身が作る発表原稿の作成も丁寧になった。また，縦割りでの総合的な学習が始まった当初は，年間を通してすべての総合的な学習の時間が 5･6･7 年生での縦割りグループで行われていたが，それも，前期は各学年，後期は縦割りでのグループ活動にマイナーチェンジが行われた。これは，発達段階による知識や理解の度合いが違うために，前期では後期の探究活動に向けての基礎を，各学年の学習活動により築くためである。こうすることで，後期の探究活動の視点や観点を養い，異学年で構成されるグループであっても，他者と協働して主体的に課題を解決しようとする姿勢や，基本的な知識や技能を育てることができる。

私自身，平成 29 年度，30 年度と 2 連連続で総合的な学習の時間の企画立案担当であったが，昨年度と，今年度でもマイナーチェンジを何点か行った。まずは，前期と後期で課題を変えたことである。昨年度までは，前期も後期も年間通して同じ課題であった。前期に各学年で調べたことを，後期に持ち寄り，それを最終目標であるポスターセッションに向けてポスターにまとめていくというのが昨年度までであった。しかし，前期の終わりにも大きな山場を作りたいと考え，今年度は前期にユニバーサルデザインをテーマに学習を進めさせ，前期の最後には「みやこユニバーサルデザイン賞」に応募をさせるという目標を作った。生徒たちは入賞という目当てのためではあったかもしれないが，身近なところに目を向け，「なぜだろう」とか「どうすればいいんだろう」ということを考え，現実の状況と理想の姿との対比から問題を見出し，課題意識を高め，その解決方法を一生懸命考

えていた。後期の学習に前期の学習をいかすグループも多かったところを見ると，前期と後期でテーマを変えるというのは成功したのではないか言える。

2つ目の変更は，グループの構成である。昨年度は，5･6･7年生それぞれ1名ずつから1グループ3名で学習を進めた。3名なので，男女の配分が難しく，すべてのグループを男女別にしていた。しかし，このグループ編成では，女子グループのほうが丁寧なポスターが多く，男子グループのポスターは雑なものが多くなってしまった。そもそも，男子だけ，女子だけというグループが日常生活と乖離しているため，今年度は男子2名，女子2名の4名で1グループを構成させた。4名なので，1グループに5･6･7年生が1～2名になり，場合によると，最上級学年である7年生が2名となるグループもできてしまったが，探究活動が苦手な生徒に得意な生徒を組ませるなど，それぞれの能力や特性を配慮したグループを組むことにより，高学年が2名になったことで探究活動が進めやすくなるということがないように，グループ編制を配慮した。

このように，このたった2年でも課題が生じ，その課題解決のためにマイナーチェンジが必要になる。今年度の総合的な学習が終わってもやはり同じで，9年間の研究や実践があっても，成果と課題に挙げたように課題が生じてしまう。その課題解決のためにも，次年度は，調べ学習がインターネットに依存しないように，学校外に出て，自らの目で調べる対象を見たり，その対象にかかわる人の生の声を聞いたりできるような環境を整えていく必要があるように思われる。また，5･6年生と探究活動を行うため，最上級学年である7年生の学びが一定以上深まらないことも検討しなければならないと考えている。もちろんグループのイニシアチブをとったり，相手の立場を考えたりしながら話し合いを進めていくという点，さらに下級学年の創造性や熱意に触れることで，7年生が得るものも大きいが，より深い探究活動を推進させるためには，縦割り活動の在り方もいま一度見直さねばならないと考えている。こちらは，すぐに良い方法を考えることができないが，教員で意見を出し合い，さらに，これまでの研究や実績をいかしながら，より良い学習形態を生み出したいと思っている。

学校は組織体として運営されており，教員や校内組織がそれぞれに連携して教育活動が行われている。その中で，特に総合的な学習の時間では，探究的な活動によって，教科の枠を超えた横断的・総合的な学習が展開されるため，全体計画や年間指導計画の作成や教材の作成に当たって，教員の特性や教科の専門性をいかした全教員的な取り組みが求められる。私が担当したこの２年は，総合的な学習の時間についてそのような連携がとれたとは決して言えない。そのような中で，この総合的な学習を進めてくださった担任の先生方には申し訳ない気持ちでいっぱいである。次に総合的な学習を企画する際は，教員同士で話し合う時間をもう少し設け，チームを組んで指導に当たり，生徒の多様な学習活動に対応，支援できるような体制を整えることができればと考えている。

参考文献

1)小林秀樹 ・西川純(2003)「中学校理科における異学年の学び合い」臨床教育学会学会誌，第2巻，p18
2)京都教育大学附属京都小中学校(2009)「小中一貫教育 子どもの育ちを9年間で見つめる～キャリア発達段階を意識して～」教育実践紀要
3)京都教育大学附属京都小中学校(2010)「キャリア教育を中核にすえた小中一貫 つながりに重点をおいた学習活動」教育実践紀要
4)文部科学省(2017)「小学校学習指導要領解説 総合的な学習の時間編」
5)文部科学省(2017)「中学校学習指導要領解説 総合的な学習の時間編」

付記

本研究は，2018年度に公益財団法人エコロジー・モビリティ財団より助成を受けて実施したものである。